

2022年度
南山大学

総合型入試
[資格・検定試験活用型]
【外国語学部】
問題集

NANZAN
UNIVERSITY

2022年度南山大学総合型入試 [資格・検定試験活用型] 問題

「小論文」 時間 90分 配点 200点 (2021年10月16日実施)

<外国語学部 英米学科>

以下の文章を読んで、設問に答えなさい。※この文章は1990年に書かれたものです。

There will be more nonwhite than white Americans in the 21st century. The “browning of America” is changing everything in society, from politics and education to industry, values and culture.

Someday soon, surely much sooner than most people in the U.S. who filled out their *Census forms last week realize, white Americans will become a minority group. Long before that day arrives, the belief that the “typical” U.S. citizen is someone who traces his or her descent in a direct line to Europe will be part of the past.

Already, in the year 1990, 1 American in 4 defines himself or herself as Hispanic or nonwhite. If current trends in immigration and birth rates persist, the Hispanic population will have further increased an estimated 21%, the Asian presence about 22%, Blacks almost 12% and whites a little more than 2% when the 20th century ends. By 2020, a date no further into the future than John F. Kennedy’s election is in the past, the number of U.S. residents who are Hispanic or nonwhite will have more than doubled, to nearly 115 million, while the white population will not be increasing at all. By 2056, the “average” U.S. resident, as defined by Census statistics, will trace his or her descent to Africa, Asia, the Hispanic world, the Pacific Islands, Arabia – almost anywhere but white Europe.

There will still be areas where there are hardly any Black families, where most of the residents have an English, Irish or German family name. But an increasing number of white people will learn, as a normal part of everyday life, the meaning of the Latin slogan on U.S. coins – E PLURIBUS UNUM, one formed from many.

Among the younger populations that go to school or who are starting to enter the work force, the change will happen sooner. In some places, an America beyond the melting pot has already arrived. In New York State, some 40% of elementary- and secondary-school children belong to an ethnic minority. Within a decade, the proportion is expected to approach 50%. In California, white students are already a minority. Hispanics (who, regardless of skin color, generally distinguish themselves from both Blacks and whites) account for 31.4% of public school students, Blacks add 8.9%, Asians and others add another 11% – for a nonwhite total of 51.3%. This finding is not only a reflection of the decreasing number of white students at the public schools. Whites of all ages account for just 58% of California’s population. In San Jose, there are more Vietnamese with the family name “Nguyen” than white Americans with the name “Jones” in the telephone directory.

2022年度南山大学総合型入試 [資格・検定試験活用型] 問題

「小論文」 時間 90分 配点 200点 (2021年10月16日実施)

<外国語学部 英米学科>

Nor is the change limited to the coasts. Some 12,000 refugees from Laos have settled in St. Paul, Minnesota. At some Atlanta low-rent apartment complexes today, English is almost useless as a language with social workers needing to speak Spanish. At the Sesame Hut restaurant in Houston, a Korean immigrant owner trains Hispanic immigrant workers to prepare Chinese-style food for largely Black customers. The Detroit area has 200,000 people of Middle Eastern descent; some 1,500 small grocery and convenience stores around there are owned by a whole subculture of Iraqi Christians. According to Molefi Asante, chairperson of the department of African-American studies at Temple University in Philadelphia, America, which was once a mix of European nationalities, is now a mix of people from all over the world.

History suggests that sustaining a truly multiracial society is difficult, or at least unusual. Only a handful of great powers of the distant past – ancient Egypt and Rome, most notably – managed to maintain a distinct national identity while embracing, and being ruled by, people of different races. The most ethnically diverse contemporary power, the Soviet Union, suffers serious social conflicts over race and national identity. But maybe such comparisons should be avoided, because those empires were started through conquest and maintained by an aggressive military presence. The U.S. was created, and continues to be defined, primarily by voluntary immigration. This process has been one of the country's great strengths, providing it with talent and energy. The “browning of America” can be an opportunity for taking advantage of the strengths of many peoples from many lands. Yet this fundamental change in the ethnic makeup of the U.S. also poses risks. Americans are known for their strength and openness to change. But past periods of rapid evolution have also, unfortunately, led to murder, war and genocide.

【注】

*Census: 国勢調査

出典：Beyond The Melting Pot by William A. Henry III, Time, Apr. 09, 1990 (c) 1990 TIME USA, LLC. All rights reserved. Reprinted/Translated from TIME and published with permission of TIME USA, LLC. Reproduction in any manner in any language in whole or in part without the written permission of TIME USA, LLC is prohibited.

【設問1】 本文の内容を日本語で要約しなさい。(1000字程度) ※原稿用紙を使ってください。

【設問2】 Japan is also becoming a country in which many people of different races and nationalities live. Do you see this as a positive or negative trend? Please give your opinion and supporting reasons in English. (Approximately 150 words) ※無地の用紙を使ってください。

2022年度南山大学総合型入試〔資格・検定試験活用型〕問題

〔小論文〕 時間 90分 配点 200点 (2021年10月16日実施)

＜外国語学部 スペイン・ラテンアメリカ学科＞

以下の2題から1題を選択して答えなさい。解答用紙にはどちらの問題を選択したかはっきり分かるように、問題番号を必ず記入してください。

- (1) 『ドン・キホーテ (前篇一)』 (セルバンテス著) から抜粋した次の文章を読み、同作品に見受けられるユーモアと〈おかしみ〉の感覚について、冒頭にタイトル(題目)を記した上で、1000字程度であなたの考えを述べなさい。なお、論述を展開させていくなかで、ドン・キホーテとサンチョ・パンサのどちらが〈ボケ〉と〈ツッコミ〉の役割を各々担っているのかも明らかにしてください。さらにドン・キホーテが過去と騎士道を表象し、サンチョ・パンサが現在と物質社会を暗示している文脈において、風車が何を象徴しているのかも論じてください。

「どこに巨人がいるだね？」と、サンチョ・パンサは訊ねた。

「ほら、あそこに見える長い腕をした奴らじゃ」と主人が答えた。「なかには、腕の長さ二レグアなどというのも珍しくないぞ。」

「しっかりしてくだせえよ、旦那様」と、サンチョが言った。「あそこに見えるのは、巨人なんかじゃねえだ。ただの風車で、腕と見えるのはその翼。ほら、風にまわされて石臼^{いしうす}を動かす、あの風車ですよ。」(セルバンテス『ドン・キホーテ』岩波書店、牛島信明訳、2010年、p. 142より)

- (2) 2021年は、スペイン人エルナン・コルテスがアステカ王国の首都テノチティトランを陥落させた1521年から500年、メキシコが宗主国であったスペインから独立した1821年から200年の記念の年である。異文化接触におけるメリットとデメリット、人類史における意義について、歴史上の具体的な事例(スペインとメキシコの関係に限らない。アジア、ラテンアメリカ、アフリカなどでも可)を挙げながら、冒頭にタイトル(題目)を記した上で、1000字程度で、第三者的な視点からのあなたの考えを述べなさい。

2022年度南山大学総合型入試〔資格・検定試験活用型〕問題

「小論文」 時間 90分 配点 200点 (2021年10月16日実施)

<外国語学部 フランス学科>

以下は、フランスの移民と郊外に関する著作の結論部にあたる文章である。それを読んで以下の設問に答えて下さい。

最後に、本書の研究対象であるフランス郊外とエスニック・マイノリティという枠組みをこえて、現代社会においてマイノリティや差別・排除について考えることがなぜ大切なのか、筆者の見解を述べたい。

そもそもマイノリティは定義のとてもむずかしい概念である。そのなかで、岩間とユラによるマイノリティ概念の7カ国国際比較は、同概念への理解を深めるうえで貴重な視座を提示した。それによれば、マイノリティ概念の主流な解釈とは、もともとはナショナル、エスニック、宗教、言語の面で多数派と異なる特性を持つ少数派をマイノリティとみなす「限定型」であったが、次第に障害者や女性、貧困層などを含めた弱者一般をマイノリティとみなす「拡散型」の解釈が多く、多くの国で主流になった。その結果、前者にあたるエスニック・マイノリティの保護を妨げるような状況が起きているという(岩間・ユ編 2007)。

このような分析を例証するような事例は世界中で顕在化している。2000年代以降、ヨーロッパでは移民排斥やイスラーム・フォビアをあらわにする排外主義が再燃し、2014年の欧州議会選挙では複数の国で極右政党が1位になるなど、その影響は政治空間にも及んでいる。アメリカ合衆国でも非正規滞在移民へのバッティングやムスリムに対する排外的な言説が蔓延し、2016年大統領選挙でも移民をめぐる 이슈 [出題者注：問題] は重要な争点となっている。日本でも国家による「上からの」ナショナリズムの強化が指摘される一方、ヘイトスピーチの増加や草の根の排外主義運動の台頭が問題視されている。このような差別や排除を食い止め、解消するための対策を立てるうえで、エスニック・マイノリティをめぐる議論をより積極的に展開することが大切なのは明らかである。

だが、エスニック・マイノリティをめぐる問題を扱うことの重要性はそれだけではない。「マイノリティ研究」というと「多数派であるマジョリティには直接関係のないごく少数派の問題を扱うもの」だと考える向きもあるが、ここには誤解がある。なぜなら「マイノリティ研究」とは「少数派だけにかかわる問題」を扱うのではなく「多数派にかかわる問題」を理解するための研究でもあるからだ。

このような角度からみたマイノリティ研究の重要性は、すでにこの領域の研究者たちによって多くが書かれてきたが、筆者も改めてその重要性を強調したい。筆者は、具体的にマイノリティ研究が次の2点で「マジョリティにかかわる」と考える。1点目は、マイノリティが受ける差別や排除はマジョリティに属する人々にも及びうる、という論点である。たとえば本書で見たように、フランスでは1970年代半ばから失業率が増加するが、最初に解雇の対象となったのは移民労働者であったが、現在では25歳以下の失業率が25%を超えるなど、社会全体の問題になっている。またヨーロッパ域外からの移民は1950年代から貧困に直面してきたが、1980年代以降は長期失業などにより中産階級から没落するフランス人の「新しい貧困層」が増加するようになった。そして現在でも人口の1割前後が貧困ライン以下の生活を送るなど、貧困や居住の不安定はもはや一部のマイノリティだけにかかわる特殊な問題ではなく、マジョリティも含めた社会問題として解決が模索されている。

同様のことは日本でも指摘できる。「世界でいちばん企業が活躍しやすい国を目指す」と宣言した現在 [出題者注：本文刊行当時] の安倍政権下で、労働者派遣法改正や改正労働基準法などの労働にかかわる規制緩和がよりいっそう推し進められ、そのなかで労働条件の改悪についての批判・懸念が高まっている。しかし、このような厳しい労働条件はずっと以前より外国人労働者に課されていた。外国人という理由で日

本人より安い賃金で働かされたり、労働者としてではなく研修・実習生として連れてこられ、「研修」の名の下に最低賃金よりもずっと安い金額での労働を余儀なくされてきた数多くの外国人労働者が以前より存在してきた。政府の施策に対して野党は「国民切り捨て」「弱者切り捨て」と批判を高めるが、その一方で、外国人は国民と同じように税金を納める義務を課されながら、参政権は与えられず、政治に直接声を反映させる回路さえ持たない。同じ国に生まれ、育ち、働きながらも「国民切り捨て」が問題になるずっと以前から「切り捨て」られてきた人たちがいる。

このような事例を安易に一般化はできないが、それでも以上の事例にあるように、日本の外国人、エスニック・マイノリティだけに起きていたことが、次第に日本のマジョリティ（特に弱者と言われる層など）にも次第に及ぶということはこれまでも起きてきた。社会で最も周辺化され、弱い立場に置かれた層のみを排除するような施策が次第に別の層にも展開されることは、上記の事例にとどまらず、何度も繰り返されてきたのである。その点でマイノリティに起きることやその人々が置かれている状況を、社会の明日を占う「鏡」として見つめ直すことには意義があると思われる。またそれは同時に、マイノリティの差別を是正し、排除を解消するための制度設計をすることが、マイノリティだけでなくマジョリティも含めた社会全体の改善につながることも意味していると思われる。

2点目は、私たちが暮らす社会の客観的な理解に到達する上で「マイノリティ」の視点について考察することが非常に助けになる、という点である。自分自身を、あるいは自分の暮らす社会を客観的に見ることの重要性は多くの人が共有しているが、それを実現するのは容易ではない。私たちは日々の生活のなかで実に多くのことを「習慣」としておこない、多くの物事を疑問に付すことなく自明視し、ステレオタイプ化しながら世界を知覚して生きている。そうした条件の下、自分自身と距離をとって客観的に見つめることは極めてむずかしい。そのような状況のなか、マイノリティの視点を経由することは、できるかぎり主観性を廃し、客観性に近づこうと非常に重要である。

マイノリティの視座に立つことで、その社会の本質がよりよく見えるという指摘は複数の社会学者が行ってきた。その事例の1つとして、ピエール・ブルデューがフランス移民研究のアブデルマレク・サヤドの著書に寄せた序文での考察がある。ブルデューは「移民」をめぐる分析が重要なのは、それが単に「移民」についての何かを明らかにするだけではなく、社会における「思惟されざるもの(*impensé*)」を掘り起こし、その社会の客観的分析を可能にする点にあると述べている。

「1つの国家のもとに1つの国民と1つの国籍があるという市民権のあり方を、当然とする根拠は何か」という問いが、移民の存在を通して提起される。また、国家が市民とは（「同一人種」とは言わないまでも）同一言語・文化共同体に属するものであると規定し、そこからの移民排除を正当化しているという事実や、「教育が国民を作り出すのだ」と同化主義的寛容を謳いながら、その背後には普遍主義を装った熱狂的愛国主義が隠れているという事実が、（国民国家の枠組みにおいて）不在同然に扱われる移民の存在を通して明らかになる。サヤドの分析において「移民」は（社会の構成員の）無意識のなかでも最も見えにくい部分を明らかにする、驚くべきツールとして機能する（Bourdieu 1999）。

また、[中略] ジンメル「よそ者論」も、マイノリティの視座が社会の客観的分析を可能にするという、同様の指摘を行っている。「よそ者」とは、集団外部に存在する「異邦人」と異なり、集団内部に存在する「外部」であり、それゆえに集団内部で周縁化され差別を受ける。だが「よそ者」は集団のマジョリティとは区別され、不平等な扱いを受けるがゆえに、集団マジョリティが自明視して疑問に付すことのない習慣や権力の支配に縛られることなく、より自由な発想をもつことができる。こうして「よそ者」は、集団全体の状況をより偏見なく見渡し、普遍的で客観的な判定を可能にする「鳥の視座」をもつことができるという。

このように「よそ者」や「移民」、マイノリティの視座を志向し、それを通して「知っているつもり社会」を見つめ直し、反省的な洞察を重ねることこそ「客観性」に近づくための数少ない道ではないか、と筆者は考える。エスニック・マイノリティの存在に関心を寄せることの意義は、マイノリティ問題ではなく、マイノリティを通してマジョリティ問題が明らかになる点にある。移民の研究を通して明らかになるのは「移民問題」ではなく、移民の存在を生み出す「国民問題」である。現代フランス社会を「客観的」に考察する上で、「よそ者」である郊外のエスニック・マイノリティの「鳥の視点」に注目すること、その視点を經由して考えようとするのはとても重要であろう。同時に、日本社会を客観的に考える際には、日本で暮らすマイノリティの視線を經由しようという営みが不可欠だと思われる。

このようにマイノリティやその差別、排除、抵抗について考えることは、マイノリティという問題領域をこえ、社会を客観的にみつめ、把握するという脱領域的な地点で大きな意味をもつ。「マイノリティ」の直面する問題は、マジョリティにとっても決して「他人事」などではない。「マイノリティの視点をないがしろにしてよい」などという研究や客観的考察はありえないのである。

(出典：森千香子『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会、2016年、283-287頁。(一部改変))

【設問】

(1) 筆者は、なぜマイノリティ研究が少数派だけでなく多数派にも関わる問題と考えているのか。本文中で挙げられている具体例の少なくとも1つに触れながら説明して下さい(200字以内)。

(2) 【設問】(1)にも関連した、本文中で書かれたマイノリティ研究が有する2点の重要性を踏まえ、マイノリティ問題について、自らが知る具体例を交えて自由に論じて下さい(800字以内)。

2022年度南山大学総合型入試〔資格・検定試験活用型〕問題

「小論文」 時間 90分 配点 200点 (2021年10月16日実施)

<外国語学部 ドイツ学科>

次の文章を読み、下記の設問に答えなさい。

ドイツの街でみられる多文化

「ベルリンはトルコ第三の都市である」というジョークがある。これはもちろん誇張された表現だが、実際、トルコ語の看板、多彩な地域の料理を出す店が並ぶ地区がある。また、この地区の小劇場や映画館、クラブは、多文化性に重点をおいた文化発信で観客を集めており、行きかう人々の姿も多彩である。このような「移民街」が具現している多文化性を、「多文化主義」のしょうちょう^(a)として歓迎する見方がある一方、「異質になりすぎた」「ドイツ語が通じない」地区（もちろんこれも極端な誇張である）の存在を問題視する声も近年大きくなっている。

「移民の背景をもつ市民」

ドイツ連邦統計局のデータによると、2012年末現在、ドイツ連邦共和国の全人口約8200万人のうち、約20パーセントの1630万人が「移民の背景をもつ住民」だとされている。「移民の背景をもつ者」とは、現在の国籍にかかわらず、「1949年以降、現在のドイツ領に移住した者、ドイツで生まれた外国籍の者、あるいはドイツ国籍所有者のうち、親の少なくとも一人が移住者であるかドイツで生まれた際に外国籍だった者」である。このようなデータをドイツ政府が包括的に公表し始めたのは、公式に「移民受入国」であることを認め、「移民法」を施行した2005年のことである。移民背景、移住経験、ドイツ国籍の有無、年齢、性別、家族構成、学歴、職業などの分布について詳細なデータが発表されており、「移民政策」が現在のドイツの重要なテーマのひとつであることがわかる。1999年に国籍法が改正され、それまでの血統主義を一部変更し、ドイツで生まれた者にも一定の条件で国籍取得の道をひらいたことも大きな転換であった。

戦後ドイツに移住した移民たち

政策変更以前から、ドイツには多くの移民が生活しており、多文化社会を形成していた。最も大きなグループは、ドイツの経済成長を底辺で支えた外国人労働者とその家族たちである。第二次世界大戦後の経済復興途上にあった連邦共和国は、労働力を補充するために、1955年にイタリア、1960年にスペイン、ギリシア、1961年にトルコなど、全九か国と労働者募集協定を結び、労働者を呼び寄せた。1973年のオイルショックをけいき^(b)にこの労働者募集は打ち切られたが、多くの人々は、家族を呼び寄せドイツに定住した。なかでも最も多かったのがトルコ出身者であり、現在でも「移民の背景をもつ市民」のなかで最大のグループであるが、そのなかには、クルド人など、トルコのなかの少数民族も含まれている。

そのほか、旧ソ連、東欧諸国からの移住者も多い。彼らは、冷戦中には亡命ひご^(c)を求め、1990年のソ連崩壊および東欧諸国の民主化後は、仕事や教育の機会を求めてドイツに移住した。なかでも、もともとドイツから東方へと移植したドイツ人の子孫である「ドイツ系住民」は、国籍法改正以前からドイツへの移住および国籍の取得が認められた。EU拡大後は、ポーランドやルーマニアからの移住者が多く、さらに、ユーロ危機以降、ギリシアやスペインからの移住者も増えている。

政府が移民政策に本格的に取り組む以前から、地方自治体、市民団体や移民たちの団体によって、移

2022年度南山大学総合型入試〔資格・検定試験活用型〕問題

「小論文」 時間 90分 配点 200点 (2021年10月16日実施)

<外国語学部 ドイツ学科>

民たちの社会生活を支援し、また、移民の文化を保護する活動は、継続しておこなわれてきた。しかし一方で、体系的な対策がおこなわれなかったことで、多くの「問題」が放置されてきたことも事実である。

「多文化社会」か、「文化の衝突」か

「移民問題」として主に想定されるのは、宗教や文化習慣の違いが大きいトルコ系住民たちとの共生の問題である。ドイツ統一にともなうナショナルな意識の高まり、2001年連続テロ事件以降の世界的な反イスラムの動き、グローバル化にともなう経済構造の変化や社会の右傾化などを背景に、「移民問題」はしばしば標的となり、ドイツでも「多文化主義の失敗」がひょうぼう^(a)された。2000年前後には、保守派の政治家が、ドイツのなかに別の社会として存在する「平行社会」を批判し、移民もドイツの「指導文化」を守るべきだと主張して賛否両論が巻き起こった。とくに、移民の背景をもつ子どもたちの低学力、低学歴、女性の「自由」の問題、またイスラム団体の活動などが、「文化の衝突」の例として指摘されやすい。しかし、このような問題の多くは、教育機会の不平等などの社会格差の問題でもある。2005年の移民法制定への議論では、これまで、文化相対主義の立場^(b)から社会的、文化的な「同化政策」に慎重であったドイツ社会民主党や緑の党も、「統合政策」の必要性を認めるようになった。現在では、対策のひとつとして、移住および国籍取得の際、最低限のドイツ語能力と民主主義憲法の知識が条件となっており、そのための講座も提供されている。また、政府は、2006年以降毎年、財界や文化団体、移民団体、宗教団体などとの議論の場として「統合サミット」を開催し、首相自ら出席することで移民の統合をめざす姿勢を示しているが、実践的な対策が取られていないという批判も多い。

多様なドイツ人が発信する文化

「移民」という概念については、「問題」ばかりが語られがちであるが、近年、ドイツから発信される文化では、移民の背景をもつアーティストたちの活躍が目立っている。2004年に『愛より強く』でベルリン映画祭金熊賞を、2007年に『そして私たちは愛に帰る』でカンヌ最優秀脚本賞を受賞したトルコ系ドイツ人の映画監督ファティ・アキン(1973-)の名は、日本でも映画ファンには知られているだろう。2009年にノーベル文学賞を受賞した作家ヘルタ・ミュラー(1953-)は、ルーマニアでドイツ系マイノリティとして生まれ、ドイツに移住した作家である。また、ドイツには、1985年に設立された「シャミッソー賞」という、移民の背景をもつ作家に与えられる文学賞がある。トルコ出身のエツダマ(1946-)やザイモグル(1964-)、日独両言語で書く多和田葉子(1960-)、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ出身のサーシャ・スタニチ(1978-)などの受賞作家たちの活躍は、現代のドイツ語文学が、多様性をもったものであることのしょうさ^(c)となっている。

浜崎桂子「移民—多様化する社会と文化」(宮田眞治他編著『ドイツ文化 55のキーワード』ミネルヴァ書房、2015年)(一部改変)

2022年度南山大学総合型入試〔資格・検定試験活用型〕問題

「小論文」 時間 90分 配点 200点 (2021年10月16日実施)

<外国語学部 ドイツ学科>

〔設問〕

1. 下線部(a)～(e)のひらがなを漢字に直しなさい。
2. 下線部①について、文化相対主義の立場とはどういうものか、100字以内で説明しなさい。
3. ドイツの移民政策を本文に即して300字以内で整理しなさい。
4. ドイツと同じように多くの移民がいる日本で多文化が共生するにはどのような政策や試みがなされるべきか、本文の内容を踏まえて、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

「小論文」 時間 九〇分 配点 二〇〇点 (二〇二二年一〇月一六日実施)

〈外国語学部 アジア学科〉

試験問題 次の「文章1」と「文章2」を読み、「設問」の問一〜五に答えなさい。

【文章1】

〈平等に貧しくなろう 社会学者・東京大名誉教授 上野千鶴子さん〉

日本は今、転機だと思います。最大の要因は人口構造の変化です。安倍(晋三)さんは人口一億人規模の維持、希望出生率一・八の実現を言いますが、社会的にみるとあらゆるエビデンス(証拠)がそれは不可能と告げています。

人口を維持する方法は二つあります。一つは自然増で、もう一つは社会増。自然増はもう見込めません。泣いてもわめいても子どもは増えません。人口を維持するには社会増しかない、つまり移民の受け入れです。

日本はこの先どうするのか。移民を入れて活力ある社会をつくる一方、社会的不公正と抑圧と治安悪化に苦しむ国にするのか、難民を含めて外国人に門戸を閉ざし、このままゆっくり衰退していくのか。どちらかを選ぶ分岐点に立たされています。

移民政策について言うと、私は客観的に無理、主観的にはやめた方がいいと思っています。客観的には、日本は労働開国にかじを切ろうとしたさなかに世界的な排外主義の波にぶつかってしまった。大量の移民の受け入れなど不可能です。

主観的な観測としては、移民は日本にとってツケが大き過ぎる。トランプ米大統領は「アメリカ・ファースト」と言いましたが、日本は「ニッポン・オンリー」の国。単一民族神話が信じられてきた。日本人は多文化共生に耐えられないでしょう。

だとしたら、日本は人口減少と衰退を引き受けるべきです。平和に衰退していく社会のモデルになればいい。一億人維持とか、国内総生産(GDP)六百兆円とかの妄想は捨てて、現実に向き合う。ただ、上り坂より下り坂は難しい。どう犠牲者を出さずに軟着陸するか。日本の場合、みんな平等に、緩やかに貧しくなっていけばいい。国民負担率を増やし、再分配機能を強化する。つまり社会民主主義的な方向です。ところが、日本には本当の社会民主政党がない。

日本の希望はNPOなどの「協」セクターにあると思っています。NPOはさまざまな分野で問題解決の事業モデルをつくってきました。私は「制度を動かすのは人」が持論ですが、人材が育ってきています。

「国のかたち」を問う憲法改正論議についても、私はあまり心配していない。国会前のデモを通じて立憲主義の理解が広がりました。日本の市民社会はそれだけの厚みを持っています。

(二〇一七年二月一日付東京新聞「この国のかたち 3人の論者に聞く」より引用。)

【文章2】

著作権の関係により掲載しておりません

二〇二二年度南山大学総合型入試「資格・検定試験活用型」問題

「小論文」 時間 九〇分 配点 二〇〇点 (二〇二二年一〇月一六日実施)

〈外国語学部 アジア学科〉

著作権の関係により掲載しておりません

(二〇一九年二月一六日付東京新聞「移民」と向き合う」より引用。)

[文章ここまで]

二〇二二年度南山大学総合型入試〔資格・検定試験活用型〕問題

「小論文」 時間 九〇分 配点 二〇〇点 (二〇二二年一〇月一六日実施)

〈外国語学部 アジア学科〉

〔設問〕

- 問一 傍線部①について、日本の人口構造の変化は、〇〇〇〇化と端的に表現できます。〇〇〇〇にあてはまる漢字四文字を答えてください。
- 問二 傍線部②の意味するところを、一〇〇字以内で説明してください。
- 問三 傍線部③について、日本政府が外国人労働者と移民を分けてこのように言っているのには、どのような理由があると考えますか。一〇〇字以内で述べてください。
- 問四 「文章1」と「文章2」をそれぞれ二〇〇字以内で要約してください。その際、各文章における外国人をみる眼、あるいは外国人受け入れに対する立場がわかるよう、要約してください。
- 問五 日本がアジア諸国出身の外国人を数多く受け入れている事実について、あなた自身はどのように考えますか。かれらの出身国(ひとつでも複数でも)、その活動や就労、そこにみられる問題などに具体的に触れながら、さらに「文章1」と「文章2」の論点を意識して、四〇〇字以内で論じてください。

〔設問ここまで〕



南山大学

入試課 入試運営係

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
Phone 052-832-3119 (平日 9:00-17:00)

Fax 052-832-3592

nyushi-ka@nanzan-u.ac.jp
<http://www.nanzan-u.ac.jp/>